名大の時間 580

「広い視野と柔軟な思考を育む」 ― 名寄市立大学の教養教育

本学の教養教育部では、「物事を多角的にとらえる視野の広い学生を育てる」ことを教育の基本理念として掲げている。大学ホームページではその目的が詳しく記されているが、要点をまとめれば、「専門的知識の習得にとどまらず、現代社会に必要な基礎力と人間的な成長を促す教育」である。

現代の大学生は、多くが将来の職業像や生活設計を意識して進学してくる。専門的なスキルの習得を目指す意欲は高く、それは学びの大きな原動力でもある。しかし一方で、大学生活の4年間は、単なる知識の蓄積期間ではなく、自立した大人へと成長する重要な過渡期でもある。

このような背景を踏まえ、名寄市立大学の教養教育は、3つの分野を柱として構成されている。すなわち「言語・情報・スポーツ」、「人と社会・自然の理解」、そして「地域の理解」である。現代社会に不可欠な外国語能力やコミュニリテラシーの育成を重視し、英語と情報処理は必修科目として位置づけられている。また、学修の基礎を築く「基礎演習」や「専門基礎演習」も重視されている。

英語教育においては、入学時にリーディングとリスニングのテストを実施し、その結果をもとに25人程度の少人数クラスに分けて授業を行っている。講義形式ではなく、演習形式での授業が中心であり、学生が主体的に関わることで、実践的な語学力とコミュニケーション能力の向上が図られている。

さらに、本学の教養教育には地域資源を活用した体験型学習も多く含まれている。たとえば「北海道野外レクリエーション」では、カヌー、ハイキング、ワカサギ釣りなどを通して自然とふれあいながら、協働や対話の力を養う内容が展開されている。こうした体験は単なる娯楽ではなく、活動を振り返り、学びを言語化する過程を通じて、学生一人ひとりの内面的な成長にもつながっている。

教養教育は、専門知識を支える基盤であり、将来どのような分野に進む学生にとっても必要不可欠な素養を育てる。名寄市立大学は、地域と共に生きる大学として、学生たちが社会の中で自らの役割を見つけ、柔軟に対応できる力を育てる教育を今後も推進していく考えだ。

教養教育部長 メドウズ・マーティン